

ゆっくりに、ゆっくりに酒井彩花さん

7歳の私の夢は世界の貧困をなくすことだった。

初めてのインドはみんなが言っていたように騒がしくて、汚くて、臭かった。生活水準は下がりっぱなしで、不快指数は上がりっぱなしだった。それでもやっぱり私は一番安い席の電車のチケットを買い、偶然会ったインド人と炎天下の道端で話すことが大好きだった。

インドではカウチサーフィンをした。泊まる家は裕福な方で、夕食にはお酒を飲みながら色々な話をした。どのインド人も口をそろえて言うことは、日本人は素晴らしい、正直者だ、優秀だ、といった賛美の嵐。私は自国を褒められることがとて

も嬉しくて、なにより他の文化を認めて尊敬できる彼らの価値観にも感動した。彼らの中には、原爆を落とされてアメリカのことをどう思っているのか、ときいてきた人もいた。私は彼らの答えに期待をもって尋ねた。「私は貧困に興味があるの。インドには飯がたべられなかったり、学校に行けなかったりする子供がたくさんいるよね。もっとインドで詳しく知りたいの。あなたたちはインドの貧困の状況をどう思う。」

「よくわからない。」一人はそう言って別の話をした。「じゃあ私がお金をあげるからそれを渡しておいで。」一人はそう言って財布を取り出した。突然、心を殴られて真っ白になった気分だった。

毎日歩くゴミだらけの道にひととき高く積みあがったゴミの山で必死にゴミをあさり続けている男の子や、朝から晩までずっと同じ場所に座っているおじさんを見た。一度だけではない。その光景がいつしか当たり前になるくらいに、だ。道行くおじさんに尋ねたら、「仕方ないよ。これがカーストだ。」って。「カーストがな

なくなったらインドではなくなってしまうよ。」そう言って笑った。カースト制度。その言葉知っている、って思った。そしてそれは過去のことだと思っていて、想像もできなかった。インドとは全く文化の違い日本で今ではもっどの先生だったか覚えてないけど、授業で先生の口から発せられたその言葉を私は口を半開きにして聞いていたのだろう。

予定の時刻から8時間も遅れた電車を待っているときに駅の待合所の隣の椅子に座っていたおじさんと無駄話をした。ついでにカースト制度のことも話した。「君がここから10km先を行ってみたとしよう。すると宗教も言語も肌の色も違う人々が住んでいる。もちろんカーストだって違う。インドはそういう国だ。多様だ。宗教も言語も肌の色も。カーストも。別に問題なんてないよ。多様性だからね。そしてそれがインドの文化だ。」と言った。彼は笑いながら話していた。君は一体何をおかしいことを言っているのだとばかりに。

「文化」という言葉はその漢字2つが抱えるにはあまりにも大きな意味がありすぎると思う。そしてたまに「文化」はずるい。「文化」は私にとって丸呑みするもの。「文化」って言われたら、考える由もなくそのままごっくんって飲み込む。

私はなにか状況を変えたくて、がむしやらに、落ち着きなく、全力で走りすぎる。だから壁に気づかずにつつかって勝手に自分に失望する。小学校の時の夢も限界を知って、いつの間にか後ろめたさに変わった。それを認めることが嫌で自分のアイデンティティを探すというのも今回の旅の理由の一つだった。私はまた自分の物差しで他人の価値観をはかってしまった。無知が一番怖いのは知っている。自分の無知がはかりしれないもののような気がして焦ってしまった。そしてこのまま旅を続けることがいいのだろうかという思いも生まれた。

次に訪れた国はイランだった。今まで30か国以上もの国を訪れたが、一番よかった国はイランだと胸を張って言える。みな私に声をかけ、当たり前のようにランチに誘い、家に招いてくれた。ホスピタリティという言葉の意味を超越しているの

ではないかと思っくらいに。そんなイランで、私はずっと心に入ってきてあたたか
くゆつくりと広がっていくような言葉たちに出会った。この国でも、日本人である
ことは無条件に褒められた。私は正直に、イランのイメージがよくないことをイラ
ン人に告げると笑いながら知っているよ、と答え、悪いのはイランの政治と各国の
メディアだ、と付け加える人がほとんどだった。ある時私はもう一歩踏み込んで、
イランの政治を変えたいかどうか尋ねると「変えたいよ。でもね、それは改革とは
違う。少しずつでいい、少しずつ変えていくんだ。大きく変えてしまったらまた歪
みができてしまう、私たちが少しずつ変えて少しでも子供たちの選択肢が増えれば
それでいい。そして今度は彼らが少しずつ変えてそれがどんどん繋がればいいん
だ。」と自分の子供たちが遊んでいるのを優しく見つめながら一人のおじさんは
言った。

ゆつくり、少しずつ。私はいつも焦りすぎていたのかもしれない。知らないもの
に出会っても別にそれでいい。時間をかけてゆつくり分かれればいい。だからこそ今
の私がインドの「文化」をそのまま飲み込んだらのに詰まりそうだから、どのく

らいかかるかわからないけれど少し噛み砕いてから飲み込むことにしよう、そう
思った。

あるイラン人と宗教の話をした。公式的にはイスラムだけど、どの宗教も尊敬し
ているよ、と彼は言った。違う、そういう話ではないんだ。その人がどうかは見
目でも宗教でもない。その人自身なんだ。宗教はその人の根本を作るかもしれない。
でもその人自身は作れない。」

私は無宗教だけど、そうだねと繰り返した。繰り返すことしかできなかった。

帰国してから、道を歩く外国人がとても目に入った。気づけば話しか
けられたり、話しかけることも多々ある。その時、国籍なんて考えない。そういう
生活が一気に楽しくなって、世界中にまだ話したことない人なんてたくさんいて、
これからもっともっと話せるって思ったら、どこにいても旅が続いているような気
がした。ゆつくりゆつくり、知ろうと思った。分からなくてもいい。ゆつくりゆっ

くり、分かれればいい。そしてゆっくりゆっくり自分を変えていけばいい。それが
「平和」への一番の近道かもしれない。

21歳の私の夢は世界の笑顔を増やすことだ。